



俳句雑誌[おき]

1月号

沖 発行所

加速

能村 研三

成田山詣

白葉女住まひし路地の籬菊

荷風登四郎終にまみえず萩は実

来る年を笑顔の年としたきかな

みちのくの海を想へり初明り

父登四郎は、信仰が厚い方ではなかつたが、元日は、いつもとは違っていた。大晦日恒例の紅白歌合戦を最後まで見て寝るのは遅かつたが、元日の朝はだれよりも早く起きて神棚に明かりを灯し、新年への意気込みが傍にいる家族にまで伝わってきた。元々江戸っ子の気質を強く受け継いでいるからか、年の始めのはりきりぶりは尋常ではないものがあつた。

特に、「沖」が創刊された昭和四十五年、登四郎は還暦を迎える一年前であつたが、この年の元旦の父の紅潮した顔は今でも印象に残っている。一誌を創刊する前の張りつめた思いがありありと感じられた。早々に家族とのお節の団欒を過ごした後、これも毎年恒例となつて成田山の初詣に出かけた。私が小さい時には一緒に連れて行つてもらつたこともあつたが、この年は我々家族も目に入らず、男として期するものを神へ報告に行くような感じであつた。帰りにはやや大きめの縁起の達磨を買ひ、左目に黒々と墨を入れ神棚に奉つた。一誌を起こす直前の男の悲願がこめられていたのかも

ひょうたん島の松に初風ねんごろに

大槌町佐々木健さん

応援の寄書車体淑気かな

海見えて加速始まる初電車

朱に淑気一閑張りの色紙箱

初波に気負ひ心を宥めをり

大風のいのちあやつる一糸かな

知れない。

元旦は年神を迎えるときで、年神の靈魂は、人間に再生産の力を与え、新たな息吹きで人間に力を復活させるものだが、父は俳句の新たな道への出発を神に誓ったのである。

初あかりそのまま命あかりかな

登四郎

登四郎は一月五日生まれであるせいか、正月新しい年を迎えることがすなわち自分の齢を一つ加えることでもあり、新年に自分の思いを述べる句が多く作られている。

風時の山河したがへ初電車

掲出の私の句は、「沖」の新年句会で、めずらしく登四郎の特選を取った句であるが、この初電車は父に昔連れて行ってもらった成田山へ行く京成電車をイメージして作った句で、山河は千葉県印旛沼あたりの枯野の風景である。

能村 研三



蒼茫集



一山忌

工藤節朗

水深く見詰めてをりし秋はじめ
秋高し隠れて小さき切支丹
黒揚羽浮びて翅に水置かず
死ぬために生きなむために鮭遡り
藁塚に添ひて花嫁導かれ
赤げらの芯を打ち込む一山忌

仁丹

辻直美

勤労感謝の日仁丹の小粒
火の恋し炎を立てぬ煮炊きして
枯野来て学生寮に灯のともる
小春日やどの角曲り帰らうか
雁渡し昭和の父母は働いて
木琴の音のころがる秋日和

ふるさと自慢

宮内とし子

捨てし地のふるさと自慢今年酒
烟るものときに炎を見せ冬はじめ
菊の香の残つてをりぬ花鋏
半日で乾く魚干し島小春
安曇野の水車の急ぐ初しぐれ
さりげなく月山にある「熊出ます」

バツカス

千田百里

城ヶ島大橋渡る秋渇き
鵜の影も歌碑も身に沁む島巡り
釣瓶落し水辺の鳥の脚短か
木洩日をのぼりゆく塵秋深し
むかしをとこにポマードのあり獺期来る
風邪の神要らぬバツカスならば要る

星月夜

大川ゆかり

烏瓜晴れ晴れと空引きよせて
おむすびに付きし目鼻や運動会
側転の子の回したる秋の空
ふんはりとのせる頬紅あきざくら
錠剤の浅き割線 星月夜
栗紐ほつれ雀は蛤に

冬三日月

北川英子

山駈け降りる晩秋の登音かな
冬三日月風のすさびに研がれをり
秋麗や泣いてしまへば気のすんで
火星に水ありやなしやと夜の長し
蘆火二つ相寄らぬまま暮れゆくも
冬銀河のいづれへ紛れ入られしや

木枯一号

遠藤真砂明

海光の歌碑へ直行バスの秋
冬が来るぞと灯台の怒濤攻め

木枯一号海鳴りをそそのかす
紅葉かつ散る雄心をしなやかに
太陽へたんぽぽ百の返り咲き
鷹の眼に水平線が引き締まる

バリトン

安居正浩

冬瓜の声を発せばバリトンか
蓑虫の揺れて明日の遠くなる
鹿の目に吸ひ込まれたる不覚かな
虚の器なり月明の一湾は
野心など疾つくの昔枇杷の花
鬱になりさうもない連れがゐて冬

生半可

吉田政江

瀬戸有田御手塩の並ぶ文化の日
村人の数より多き小鈴柿
生半可知恵におぼれし鴟の贄
窓一面花野が見えて齒科治療
受診券機械にもらふ今朝の冬
秋光土浦吟行の蛇腹孕みの帆曳船

崖 辻美奈子

天上に師の箒あり霜降り
冬瓜や大人も少しづつ育つ
帰らざる猫と帰らぬ冬帽子
残りけり柿の次郎が肩張つて
冬隣アツプルパイに崖がある
白馬山麓四方に落葉の乾く音

半濁点 久染康子

黒松の幹の乾反りや雁渡し
すいつちよの二泊三日の籠残る
芒原うねるは風の大蛇おろちかな
阿弥陀籤めくからす瓜の蔓たぐる
青空の半濁点や木守柿
文化祭の吹奏学部発光す

遠近法の冬 千田 敬

東京に木枯一号白湯を吹く
抽出に妻への誓紙レノンの忌
携帯を閉ぢても光り神の留守

ポプラ並木遠近法の冬が来る
日にかざす紙幣の透かし露けくて
一病にいのち見ゆる日冬木の芽

京光年 秋葉雅治

炎の連鎖果てなく続く峡もみぢ
目測の精度高まり獵期来る
百歳の医師の触診冬ぬくし
夢いくつ棄て熱爛に辿り着く
星冴えて牧草群は香を蔵す
億年超え京光年の冬銀河

門城の古址二句 荒井千佐代

城跡は巨石だまりや木の実落つ
石仏に魂の鎮もる草の花
わが視野の端に干乾び鴟の糞
野辺送り稲架林立の畦道を
どの皿もパセリの残り秋祭
北窓を閉ざす我が身の門も

訥 弁 上 谷 昌 憲

訥弁の車内放送野分立つ
露びつしりと置き去りのオートバイ
懸巢鳴き俄かに空の邃くなる
窯変のはじまる気配菊月夜
対岸も少年野球穂絮飛ぶ
熟柿落つ地球に七十億の人

波状攻め 藤原照子

夕映えや群をこぼるる渡り鳥
閑散の漁港鳶舞ふ昼の月
高層の秋灯連続不連続
深みゆく秋補聴器の適ひけり
駅前の夕空椋鳥の波状攻め
紙鍋の火の尽きてより長き夜

ふるさとめく 田所節子

風芒日ざしを磨きぬるやうな
一番星澄み別棟の母へ膳
待たれぬるわが家のありて秋の暮

運動会日ざしの匂ひ着て帰る
師碑ありてふるさとめく地曼珠沙華
縁みなふとした出会ひ赤のまま

ひとり道 菅谷たけし

秋灯下また寄り道の調べもの
無月かな湯舟に心ぬくむまで
駅からはひとり道なり後の月
鬼の子の風のなき日は眠りづめ
穴惑林檎先生三回忌ひこの世なかなか落ちつかず
温め酒酌みし夜のまだ昨日ごと

限りなき 武藤嘉子

夕ぐれの遊びごころのからす瓜
いやに爪伸びて秋思の極みかな
雁渡るやはらかき雲友として
大いなる花野と空よ背伸びする
微熱あり木枯し一号吹き抜けて
冬来るこの限りなき草を抜き

潮鳴集

巻 尺

林 昭 太 郎

弁当の輪ゴムが飛んで秋高し
鳥渡る薄商ひの兜町
曼珠沙華炎といふ字さながらに
巻尺のかしやんと戻り冬に入る
冬麗や匙を埋めて砂糖壺

ぼ

栗 原 公 子

鳥わたる写真古りたるパスポート
瘦せたがる女ばかりや神の留守
真珠いま育ちてをらむ月明り
月光や玩具の汽車のふいに発つ
みどりごの口ぼと眠る小春かな

楽 焼 き

諸 岡 和 子

紙飛行機花野の沖へ消えたきり
カダファイ死す鶏頭未だ枯れ拒み
ポケットに鍵と小銭とどんぐりと
先客はあきつ水上カフェの卓
楽焼に漆黒の艶冬立てり

男 坂

佐 野 と き は

鳥の来て人来て森の文化の日
サッカーボール蹴るや小春の放物線
木の実落つ弾み転げて男坂
天空の気流眩しき渡り鳥
行く秋の彩をころがす万華鏡



『勾玉』

(自選二十句)

工藤節朗

艶もたぬ曲線はなし畦を塗る
吟行のはじめ処刑の花野より
啓蟄の勾玉は輪に収められ
黄の花にはじまる五月洩民野
屋根替の祭殿百の火をともし
つくつくし一粒の碑に芭蕉曾良
恋螢落ちて流れに身をまかす
流れては浮巢に戻る力あり
病む母の手の隙間より螢とぶ



恋にがき頃の一書も曝しけり
夜濯ぎの絶えざる水を母郷とす
甚平のふかきところで紐結ぶ
たてがみにのぼりつめたる草虱
死は生に優るみちのり曼珠沙華
啄木の帰らぬ橋の一葉落つ
灰に書き習ひし母の炉を開く
狐火を見る会長に仕立てられ
母死後も雪見障子を開けて置く
寒風を戻りしおのが耳二つ
冬鴟の寡黙はわれと闘へり

『遠眼鏡』

(自選二十句)

岡崎 伸

雲辺の寺へ遍路の鈴二つ
遠眼鏡百ほどそろふ初鴨に
千枚田窺ふ鷹のまばたかず
籠ひとつむしろ一枚櫛芽売り
朴の花いま還暦のころざし
風を呼ぶ葭の間仕切川床座敷
牡丹千天を暗しと思ひけり
藪からし引けば生垣まで動く
男とはかくあるべしと大枯木

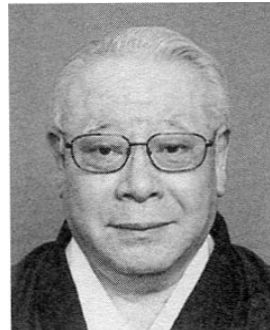


あめんぼと同じ身軽さ職退けり
霧晴れてをらばをらばと富士見茶屋
武ちゃんのを在さば千金花筵
青もまた音なきほむら紅葉山
今生れし句碑にみそぎの走り梅雨
無一物否無尽蔵大枯木
寝袋に眼を閉ぢ惜しみ星月夜
息吸つてゐると思へず揚雲雀
晴ればれと空仰ぎをり捨案山子
春愁を知らぬ男とゐる疲れ
雲海を貫き槍の主峰立つ

「年間二十句」(自選二十句)

能美昌二郎

残暑光ろくろくに纏ひ付く十指
執念を燃やし赤あか曼珠沙華
新松子夢はでかいがまだ青く
トルソーや冬日はいつも斜めより
入るに入れず出るに出られぬ蓮根掘
波音に風音重ね枯岬
べらばうめこれ持つてけと年の市
枯蔦の中に灯ともす喫茶店
天と地をつなぐひとすぢ風の糸



三代の男ばかりの小正月
黙といふ諾もあるべし冴返る
衣擦の音すれ違ふ実朝忌
握手して力をもらふ梅真白
啓蟄や本にはさまれ正誤表
家中の畳を拭いて更衣
今年竹少女剣士の白袴
六月の雨に送られ嫁ぎけり
羅やとんぼの翅のごとく着て
相寄りて金魚掬ひのひざと膝
ラリツクの昆虫好きや青葉光

沖作品



能村研三選

秋思ふと行き交ふ夜間飛行の灯

市川市

荒井千瑳子

四面みな三時に秋の時計塔

小さき掌なれ木の实溢るるほど与ふ

柿赤し半鐘いまだ残る村

新酒酌む山紫水明ありてこそ

水澄めりたつきを繋ぐ橋幾つ

千年の杜の窪みに木の実落つ

彼岸花土にもどれぬ放射能

赤ワインもて秋冷の唇ぬらす

向日葵の金輪際の枯れの相

セールスレディほがらかに来る敬老日

木の実出づ眠りにつきし子のズボン

玉入れの玉秋天へ数へられ

アジ聞きし教室いまも蔦紅葉

調律の音にまどろみ秋の雨

東京

五十嵐章子

茨城

岡澤 田鶴

連弾を聞かせてみよや鉦叩

市川市

町山 公孝

冬雲の落ちて来るなり九十九里

ボヘミアングラスに新酒うす明り

イクメンの赤きセーターすれちがふ

小窓へと紫煙誘はれ冬日差

蔓草に蔓のふりしていぼむしり

風に乗り声かすれたり草雲雀

愛といふ束縛ありぬ蔦紅葉

忽然とあらはれて消ゆ曼珠沙華

残像のあざやかなりし曼珠沙華

天職のありて勤労感謝の日

戒名など要らぬと鮫鱈鍋つつく

歴伝の荒ぶる読経寒行堂

脇役に存在感の冬帽子

市川市

須山 登

岐阜

花田 心作

沖作品 15句選評

*
能村研三

四面みな三時に秋の時計塔 荒井千瑛子

四「三」という数詞の効果が面白い。久保田万太郎に「一句二句三句四句五句枯野の句」があるが、数詞をやみくもに使うのではなく、その数字の持つ意味もきちっと一句の中で納得いくものでなければならぬ。四面の時計塔というと、まず札幌の時計台を思い浮かべるが、天に向かってそびえる中央の時計塔はシンボリックな建造物として、人々の印象に深く残るものである。その指している時間が三時で針は直角となっているのも美しい。秋も終り頃になると、日が沈むのも早く周りの状況も暮早しの様相である。

千年の杜の窪みに木の実落つ 岡澤 田鶴

「杜」と「森」は「もり」という意味では、両字とも同じ意

味であるが、「杜」は、神社をかこむ木立という意味の「もり」の意味がある。例えば、「鎮守の杜」と書く場合などである。伊勢の神宮林のように、多くの社は自然と人との関わりの中で育まれてきた。岡澤さんは茨城の方なので、鹿島神宮あたりを詠んだものと思われるが、平安時代の頃から、伊勢神宮と鹿島神宮と香取神宮だけが神宮と呼ばれていたこともあったそうだ。その歴史ある杜の窪みに落ちた木の実は何かの精霊のような気もする。

セールスレディほがらかに来る敬老日 五十嵐章子

老人への売り込みは、詐欺商法などが報道されてから、中々難しい状況にある。あまりしつこくお願いするのも気がひけるが、敬老の日にセールスレディは、持ち前の明るさでお年寄りを訪ねてきた。お年寄りの方も、セールスレディとは気心も知れて信頼感もあり、その訪問を歓迎しているようでもあった。

小窓へと紫煙誘はれ冬日差 町山 公孝

最近喫煙に対する風当たりが厳しくなっている。公共施設やレストランは全面禁煙に踏み切るところが増えていて、ビル内に喫煙所さえ置かない「完全禁煙」のオフィスビルも出てきた。紫煙派にとっては、肩身が狭い世の中である。しかし、それでも何とかして吸いたい。上五の「小窓へと」という細やかな描写の中に、肩身の狭さの中何としても吸いたい様子が伺われる。

(以下略)